かんきつのカイガラムシ対策

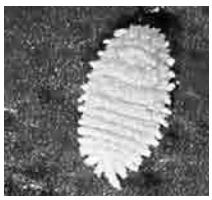
カイガラムシはかんきつ栽培における重要害虫で、葉や枝、果実に寄生して樹液等を吸汁し、密度が高くなると樹を枯死させることもあります。また排せつ物に繁殖するすす病菌によって果実が汚れ、寄生した果実の周囲は緑色が残り着色が遅れるなど、品質を著しく低下させます。

近年、かんきつ栽培におけるカイガラムシ類の被害が拡大しており、その原因はカイガラムシの卵や虫体がロウ状の物質で覆われているため、薬剤を散布しても薬液が虫体にかかりにくいこと、樹冠内部・下枝の葉裏に寄生するため防除が難しいこと、密植園が増加して薬剤がかかりにくくなっていること、温暖化の影響によりカイガラムシの初発時期が早くなり防除適期が合わなくなっていること等が挙げられます。

カイガラムシ防除のポイントは、冬期にカイガラムシの密度を下げること、幼虫の発生時期を把握して、虫体に被覆物が十分に形成していない幼虫の発生ピークに防除を行うことが大切です。カイガラムシの種類・生態等を再確認し、適期防除につとめましょう。

ヤノネカイガラムシ

ヤノネカイガラムシの被害


フジコナカイガラムシ

フジコナカイガラムシの被害

イセリアカイガラムシ

イセリアカイガラムシ寄生状況

○越冬期防除（12～1月）

越冬は1齢から成虫までのすべての発育ステージで行われますが、1齢や2齢などの若い齢期の個体はほとんど死亡し、翌年の発生源となるのは未成熟成虫と成虫です。春以降の発生を少なくするためには、まず越冬期の防除が大切です。

幼虫で越冬するカイガラムシは、せん定前の12月下旬から1月中旬にかけて、マシン油乳剤95％の40倍か、マシン油乳剤97％の60倍いずれかを散布すると効果的です。冬期はロウ物質が薄いので、マシン油に包まれると呼吸ができず、窒息死します。越冬密度を下げることで、春以降の初発を大きく抑えます。

○越冬期応急防除（3～4月）

12月～1月にかけて防除できなかったところは、発芽後の4月にあらためて防除することが重要です。

前年、果実にカイガラムシがついていた圃場では、3月以降に剪定を行いながら被害の様子を観察して、カイガラムシの発生しやすい樹幹内部を中心に寄生の有無を確認してください。

寒害を受けやすいところや、樹勢の悪いところは剪定作業を行ってから、3月下旬にマシン油乳剤97％の60倍を散布します。この散布で、ヤノネカイガラムシ以外のカイガラムシや越冬しているハダニ・コナジラミ類も同時に防除できます。

○第1世代防除（5月下旬以降）

5月下旬から、越冬したカイガラムシが産んだ卵が孵化し、第1世代があらわれ始めます。

この時期の防除は、枝や葉に対する寄生の防止と、第1世代の卵から生まれる第2世代の発生を少なくすることが目的です。

第1世代の幼虫発生ピークが6月中旬～7月上旬なので、6月から7月の摘果時期に果実への寄生状況を観察し、1回の作業で1匹でもいたら防除を行います。

発生がみられたらアプローチフロアブル1000倍を、通常防除をする場合はマシン油乳剤97％を150倍で散布します。

○第2世代防除（7～8月）

第2世代は7月上旬から中旬に孵化します。ヤノネカイガラムシの第2世代の発生ピークは8月中旬から9月上旬です。この時期に孵化した幼虫は果実に寄生して大きな被害を与えるので、防除は十分に行う必要があります。

幼虫の発育は早く、1齢から2齢までは約15日、成虫までは45～50日と短くなります。成虫になると被覆物質により防除がむずかしくなりますので、第2世代の防除は果実に寄生させないことが最大のねらいです。

防除適期は第1世代と同じように2齢幼虫のピークで、第2世代1齢幼虫初発日から30～35日後ごろの8月上旬から中旬に、スプラサイド乳剤40を1500倍で、樹冠の奥まで液剤が行き届くように、たっぷり散布します。

前述したカイガラムシ各世代の発生時期は目安であり、その年の気象条件により前後します。圃場で樹体をよく観察し、効果的な時期に防除して被害を減らしましょう。また、農薬を使用する際は希釈倍率や使用時期、回数等を農薬ラベルで再確認してください。